

ゲイ



富田英三著



東京書房版

ゲイ

昭和33年6月10日 初版発行

昭和33年6月21日 3版発行

著作 富田英三

発行 木原宏

編集 藤崎斐虎張

印刷 享有堂印刷所

製本 丸山製本所

整紙 万常紙店

発兌 株式会社 東京書房

東京都渋谷区上道4丁目30番地

電話 渋谷46局1077番

増替口座東京81133番

乱丁落丁のものはお取替えいたします

定価240円

そのはじめに

ポオドレエルの断片「火箭」の中に

— 知的な女を愛するのは男色の快楽だ—
という一節がある。

偉大な、詩人であり、モラリストであり、心理分析家でもある、ポオドレエルの言葉のはしをとらえて

— だから男色は知的な快楽である—

だとか

— 男色者は、だから知的な快楽者である—

などと、僕は、ここで、いおうとしているのではない。

第一、僕は、心理学者でもなければ、それほど男色主義者でもない……。

ただ、ポオドレルの言葉を借用したのは、僕が、ポオドレルの、その言葉に酔っているからだ。

—放蕩のあとでは、人は、常に、いよいよ孤独に、いよいよ見棄てられたように感じる。

と、こう正直に、赤裸々に、苛烈に告白する者が他にいるだろうか。

僕は、いま、この「ゲイ」を書きはじめて、彼ポオドレルがいう

—暮春の頃の、しっとりとした夕ぐれ、緑の闇—の中に、かくれてしまいたい気持ちでいっぱいである。

そしてまた

—魂の指揮者である神経中枢を犯す時、阿片ははじめて悲劇的である。さもない時

には、阿片は解毒剤であり、歡樂であり、極端な午睡である――

という、わが尊敬するジャン・コクトオの仰せあるように、僕自身、麻薬をのんだあとの午睡をたのしんでいるようでもある。

もくじ

そのはじめに	1
ママ青ちゃん	9
咲き乱れる隠花植物	17
男色者の手紙	27
変質の群	39
蘭子	49
リズのパンティ	59

女装癖者	177	カマンチ族	171	第三の性	129	演技派ハリイ	123	ドールのおしげ	115	美少年ケニーと自殺したミチル	97	系図	91	発生	85	ゲイと少女	79	S・BとM&W	73	結婚の生態	65
------	-----	-------	-----	------	-----	--------	-----	---------	-----	----------------	----	----	----	----	----	-------	----	---------	----	-------	----

ゲイという言葉？

187

ニューヨークの谷間

195

ニューヨークの黒い女装の男

225

そのおわりに

241

ママ青ちゃん

「あら、いらっしやい…」

蒼白い灯の下の、割となだらかな階段をあがって顔を覗かせると、大柄な、はっきりした目鼻だちのママが、ワーッと声をあげて、飛んできた。

「あらァ、やァよ、顔を見せる早々、抱きついたりなすって…。先生の理知と教養が泣きますわよ。もっとも、私は、ぐっとリアリズム…、色と慾が信条ですけど…今やね…ホホホ…」

飛んできた瞬間、たて続けに、そうしゃべるママの、それが、太いのどから出るしやがれた声だった。

ママ…と、そこでは、そう呼ばれている。が、それが、時にはかつらをかぶって女

装もするけれど、そして、その女装して踊る日本風な舞踊が、またとない悩ましさに溢れて、妖艶ただならぬものを漂わせもするのだが、彼女が、れっきとした男性であることはいうまでもない。

バア青江のママ「青ちゃん」である。

バア青江は銀座西二丁目、並木通りを横にそれた、細い、暗い、コンクリートの溝板をはね返す露路の中の二階なんだ。

僕は、銀座へ出ると、つい、ふらふらと、その露路に足がむくのだったが、正直に言って、ママの「青ちゃん」の妖気に魅せられているのかも知れない。

女装するのは、一週に一度か二度、稀だった。いつもは、男刈の頭に、男のシャツとズボンだった。が、チラッとウインクする。そのきれの長い、澄んだ眼の上に塗られたアイ・シャドオや、淡く描きこんだ黒いめばり。そしてまた、ひろげたシャツの胸元にぶら下げたネックレスや、白い手首に光る腕飾り……それらのすべてでつくり出される彼の異常な雰囲気の美しさ。

煙草をくわえると、間髪をいれなくてマッチを擦ってくれる。

そのママの、白く、艶々しくマニキュアされた手の、指先の爪の色。手の甲は、青白く血管が透きとおって、それは、まごうかたなき男の手のそれだったが、まぶたを細めて、かすかな視力の中で眺めておれば、女の手とおもえる美しさである。いわば、それは、あの歌舞伎の女形が、かもし出す、しなやかな所作の手さばきにも劣らぬ、せん細な気の配りからくる、女形としての手の表情のせいかも知れない。

ゲイ・ボーイと呼ばれる種類の美少年……という可憐な時代の年配は過ぎていた。年増である。そのママを見る度に、僕は、いつも、誰かに似ているとそうおもうのだが、思い出せない。

いつか、どこかであった年増芸者のおもかげを僕は追っているのかも知れないが、そんなことを、ふと、囁くと

「私が、若い頃の国太郎さん……前進座の……その国太郎さんに似てる……とおっしゃいますわ……尤も、それは女のお客さま……」

不思議と、バア青江には女の客も多かった。

何を求めてくるのだろうか、男としての彼らを求めて……だろうか。

中年の女はこういったっけ

「ここへ来るのは、私たちが求めている女らしさ…といったものがぶんぶん溢れているからよ…女の私たちから女の匂いがなくなろうという時代に…」

そして、まだはたちの娘たちは

「私たちにないものが感じられるのよ。そして、男と女の間である不思議な人類の、不思議な美しさがかもし出すセキシーなムードのせいよ」

しかし、それよりも女の客の求めているのは、やはり、彼ら…彼女らといった方が判りいいかも知れないが…の中にひそむ、生理的な、動物的な、男性であるという厳粛な事実にちがいない。

「ねえ、ママ、どうして、そんなに綺麗なのかしら…」…と女がいう。

「まあ、お口のうまい…」とママが答える。

「だって、そう、その口を押える手さばきだって…」

と女の子がうっとりしていうと、ママは、まるで、芝居の舞台の、役者のようにまをもたし、めりはりよろしく

「…てやんでえ」と、とたんに男性に還元して「やめてくんろよ、なァ、そんなお世辞は…ハッハッハ」

そこで女の子が、いっそ、からだのやりばにもだえるように「いかすッ」と叫ぶのである。女らしく装った、彼の姿の中に隠された男性を発見するうずきの歓喜ではないのか。

それはまた、隠花植物を愛する心に通ずるものだろう。未知の世界のものは、ほんのちよっぴり、その片鱗をうかがい知る時に、一層興味深いものなのだ。解放された女性の性の遊びの、それは、かそけくも、冒険の中に見出したはけ口なのだ…といったら女性を軽蔑したことになるだろうか。

「青ちゃん、踊ってくれるかい？」

「あら、こんな年増でもいいんですか？」

「…てなこといって、青ちゃんは自信たっぷり…」

「…あら、そうかしら…。断然、私、自己嫌悪におちいつてるのよ…」と、しおらしいが、その次の瞬間は「よよし、じゃ、いっちょ、踊るか…ホイ、レコードをか